

女子野球と横浜

表紙に「Scrap Book 女子野球大会 仮装文化祭」と手書きでタイトルが書き込まれた一冊のアルバムが、横浜市史資料室に保存されている。行事の様子を記録したキャビネ判サイズのモノクロ写真二三枚が、台紙に貼り込まれている。

女子野球大会と仮装文化祭は、一九四七（昭和二二）年八月二十九日と三〇日に、貿易復興祭の関連行事として開催されたものである。表紙に「Culture Section」とあるので、おそらく同年八月に設置された横浜市民生局文化課で作成したものと推測される。

貿易復興祭

女子野球や仮装など、あまり市の公式行事にはなじみそうもないが、市の『事務報告書』にも記載された市と神奈川新聞社共催の行事である。前年秋に横浜市では第一回芸能コンクールを開催し、その後定例行事化される。また市の文化課には、生活文化係・勤労文化係と芸能文化係が置かれるなど、この頃の横浜市では市民の文化活動を重視していた。仮装行列については、開港記念行事として戦前からの歴史もある。しかし、なぜ女子野球なのかという点は、今一つよくわからない。貿易復興祭とは、占領下に禁止されていた民間貿易が一九四七年八月から再開されるのを記念して、横浜市主催



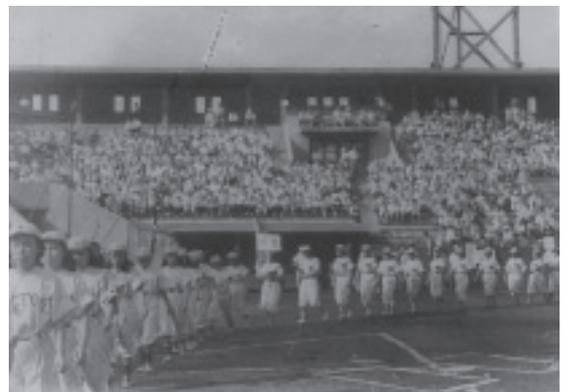
アルバム表紙
横浜市史資料室所蔵

で開催された記念行事である。祝賀式典・市民大会の他、各種展覧会、バザーなどが八月一五日から二一日にかけて開催され、花電車の運行も行われた。

女子野球大会と仮装文化祭などは、貿易復興祭に連動して「働く市民の六大文化祭」として企画された。戦後、各企業や労働組合では文化サークルの活動がたいへん盛んだった。そうした文化団体によって、横浜民主文化連盟が一九四七年三月に結成された。

その横浜民主文化連盟が「働く市民の文化祭」を提案し、市がこれに答えて職場対抗相撲大会、女子職業人の総合体育祭、職業人納涼仮装文化祭、職業人の手工芸展示会、職業人芸能コンクール、職場の記録映画大会の六つを企画した。この内、納涼仮装文化祭は企画通り実施され、女子職業人の総合体育祭は女子野球大会と姿を変える。その他はミスヨコハマ・ミスターヨコハマ、納涼ダンスパーティーに変更され、残り二つは不明である。

ここまでの経緯を見ていると、四月に選出された社会党所属の石河京市市長の影響もあって、勤労者のための行



女子野球大会入場行進
ビクターチームと日産チーム
1947年8月29日

事という色彩が濃い。また、すでに女性の参政権が認められ、日本国憲法もこの年五月に施行されて、女性が強く意識されていたこともうかがえる。女性の地位向上の一環として、各企業チームによる女子野球大会が発案されたということが考えられる。元々ソフトボールチームのあった横浜女子商業が、唯一学生チームとしてこれに加わった。

女子野球大会

一九四七（昭和二二）年七月二〇日の『神奈川新聞』に、横浜市と神奈川新聞社共催で（後に横浜民主文化連盟が加わる）、女子野球大会が開催されるという告知が掲載された。「オール横浜第一回女子野球大会」と銘打ち、職場や労組、学校、地域のチームに参加を呼びかけている。

この告知でも、なぜ女子野球なのかについては触れていない。日本初の女子野球大会であることが、強調されているだけである。

「女子野球応援歌」の歌詞が、新聞に掲載されている（『神奈川新聞』一九四七年八月二五日）。それを見ると、女子野球に参加する女性たちは夢と希望にあふれ、「平和日本のさきがけ」と謳われている。そして、「ハマの新歴史」「待望の女子野球」と、その大会の意義を讃えている。横浜が、新たな女性スポーツのさきがけの地となるのだという意欲がうかがえる。

八月一二日には、参加六チームが決まったと『神奈川新聞』に報じられている。八月二二日から二四日にかけて同紙は、「女子野球チームの横顔」と題して各チームの紹介記事を連載した。それによると、ビクター戸塚は、本社から六大文化祭の通知を受け取って「各職場を駆けずりまわって集めた選手ばかり」、ビクター横浜も参加が決まってから募集、日産は野球や陸上競技の経験者を集めて編成、文寿堂は同じ職場の同年代で編成、と多くのチームはにわかづくりだった。オハイオのみは、半年前にチームを編成してから練習を積んできたという。いずれのチームも参加が決まっただけで、猛練習を重ねてきたと紹介されている。

また、横浜女子商業学校は、校内の学年対抗野球に参加した選手から選抜した。「女商の野球は昭和一〇年から



女子野球大会始球式の石河京市市長 1947年8月29日



オール横浜女子野球大会優勝旗

の歴史」があると校長が述べている（『朝日新聞（神奈川版）』八・二一）のは、おそらくソフトボールのことであろう。純白のユニフォームを身につけていたというが、「実は神中クラブの借物」と、男性用のユニフォームを借りていたようだ。



女子野球大会 横浜女子商業学校の応援風景 1947年8月29日



女子野球大会 試合の様様 1947年8月29日

二六日には打合会を開いて、進行・組合せ・ルールなどを決めた。入場行進のあと開会式、試合は一回戦・二回戦・決勝のトーナメント方式で行われる。投球はオーバークローの軟式野

球であったが、試合回数は五回までで、死球出塁を認めないなど、簡便なルールだった。優勝チームには横浜市から優勝旗と市長杯、準優勝チームには神奈川新聞社杯、優秀な応援団には楯が贈られることになっていた。なお、表彰式のあとには、松竹と新東宝の俳優チームによる特別試合が予定されていた（『神奈川』八・二七〜二九）。

こうして女子野球大会は、占領軍が接収してルー・ゲリック球場と呼んでいた公園球場を会場に、二九日朝七時半の入場行進で幕を開けた。石河京市市長の始球式に続いて、八時には第一試合が始まった。七時半までに内野スタンドはほぼ満員、正午には外野席まで埋め尽くしたという。文寿堂とオハイオが決勝まで勝ち進み、文寿堂が優勝した。応援文化賞は、横浜女子商業が獲得した。午後三時半から閉会式が行われた後、四時から俳優チームの試合が行われ、新東宝チームが勝利して、午後六時にはすべての予定が終了した（『神奈川』八・三〇、三一）。

応援団を除けば男性の観客が多いと、各紙が指摘している（『朝日』八・三〇、『毎日』八・三〇）。女子野球大会を見る眼も、「ハマ名物」の「女野球」（『朝日』八・三〇）や「横浜文化祭の呼び物」（『読売』八・三〇）などと、物珍しさやショー的な見方をしていて、必ずしもスポーツとしての関心ばかりではなかったことがわかる。ただ、横浜の地で女子野球という女性のスポーツが新たに始まったことを、アピールすることには成功したといえよう。

米国女子野球チームの来日

そもそも女子野球と横浜には、歴史的な縁もあった。戦前にアメリカの女子野球チームが来日した際、横浜でも試合を行っている。その記憶が、戦後の女子野球大会に結びついていることも充分考えられる。

一行は一九三八（昭和一三）年一月一〇日秩父丸で横浜港に入港した後、東京のホテルに入った。多くの新聞では米国女子野球団と呼ばれているが、朝日新聞によればカリフォルニア州女子軟式野球選抜チームであった。また、軟式野球といっても、「原語でソフト・ボールと称し」、投手は下手投げ、ボールは一一インチ四分の三というので、現在のソフトボールのチームと考えるとよいようだ（『東京朝日新聞』一九三四年九月一〇日、一〇月一日）。日系人二名と、ハイスクールの学生六名が加わっていた。

目的は、観光を兼ねた日米親善と軟式野球(ソフトボール)の普及であった。マネージャーとして元チャップリンの秘書だった高野虎市が同行していたが、興行的なものではないという。費用は各自が一万五〇〇〇ドルを用意、収益があっても寄付する予定だった。後に海軍省と日本赤十字社にそれぞれ一〇〇〇円寄付したと、報じられている(『横浜貿易新報』一〇・三〇)。また、一四日に東京後楽園で行われた試合には、陸軍病院の傷病兵が招待されていた(『東京朝日新聞』一〇・一五)。

試合は、チームを日本チーム・米国の二つに分けてのエキシビションゲームであった。試合の合間に、日光・横浜・鎌倉などでの観光も予定されていた。横浜での試合は、横浜公園球場で一〇月二十九日・三〇日に二試合が行われる予定だった。主催は国際子女親善協会、後援が横浜貿易新報社となっている。

二十九日の試合は、少年音楽隊に先導された入場行進や花束贈呈、始球式などの様子が写真入りで大きく報道された(『横貿』一〇・三〇)。しかし、三〇日の試合は、前夜からの雨で中止されたと思われる。三十一日には、再び後楽園球場で試合を行っている。そして、その夜の列車で神戸に移動、マニラに向かう予定だと報じられている(『横貿』一一・一)が、その後の動向は不明である。

ちょうど中国では漢口が陥落するな

ど、日中戦争の戦況が華々しく紙面を占めるなかで、アメリカ女子野球は来日時から写真入りの記事で紹介されるなど、異例の注目を集めていた。

女性の野球試合そのものが珍しかった上に、ショートパンツというユニフォーム姿も話題になった。なかには風俗的に好ましくないという意見もあったようだが、アメリカのチームとすることでこれは黙認された。しかし、興味本位の男性客もいただろうことは否定できない。そのことは、戦後の女子野球でも同様である。

女子プロ野球の発足

戦後女子野球の歩みを詳しく紹介している桑原稲敏『私たちのプレーボール 幻の女子プロ野球青春物語』(風人社、一九九三年)と常蔭純一『私の青空 日本女子野球伝』(径書房、一九九五年)は、いずれも横浜の女子野球大会を戦後女子野球史の始まり、女子プロ野球のきっかけと評している。

桑原は、女子プロ野球チームのさきがけとして一九四八年に、ダンスホールのダンサーによって結成されたメリーゴールドが横浜のオハイオに挑戦して、二連敗したエピソードを紹介している。このメリーゴールドに横浜女子商業の六選手が加わって編成されたのが、初の女子プロ野球チームともいわれる東京ブルーバードであった。この翌年、新たに結成されたロマンズ・ブルーバードが正式には女子プロ野球

チーム第一号とされている。以後、女子野球チームは数多く結成されては再編を繰り返す。

女子プロ野球も当初は、スポーツというよりシヨリのな要素が強かった。チーム数が限られている内は、野球大会の前座や遠征先の男性チームとの対戦など、各地を廻つての興行的な活動に終始した。一九五〇年にチームが増えて、日本女子野球連盟が結成されてから、ようやくリーグ戦や各種カップ戦などが開催されるようになった。

女子プロ野球は二年で運営が行き詰まるが、女子野球は社会人野球として一九七〇(昭和四五)年まで存続した。その間の経緯や、チームと選手については、先の二書が詳細に紹介している。

社会人に移行した女子野球は、一九五二(昭和二七)年から一九五八(昭和二三)年まで毎年、「横浜市長杯争奪戦」を横浜平和球場で開催した。ルー・ゲーリック球場はちょうど五二年四月に返還され、当時の平沼亮三市長によって平和球場と命名されていた。平沼市長は慶応大学野球部の出身、市民スポーツの振興に力を尽くし、「スポーツ市長」とも呼ばれた。

『横浜スポーツ百年の歩み』(横浜市教育委員会、一九八九年)は、「横浜女子野球大会」という項目を掲げ、女子野球大会の開催と共に横浜市長杯争奪トーナメントが毎年開催され、東京都知事杯争奪大会と並んで二大トーナメントと呼ばれたことを紹介してい

る。いずれも、女子野球と横浜の関わり深さを象徴しているといえよう。ただし、同書は一九五四年までの開催としているが、実際には一九五八(昭和二三)年まで八回開催されたことが確認できる(『神奈川』五八・一一・九)。

この大会を後援した『神奈川新聞』は、第一回女子ノンプロ野球大会が二七日・二八日に開催されると告知し、「横浜が女子野球発祥の地として全国にさががけている」と強調する(九・二五)。岡田乾電池・三共・京浜急行・エーワンポマード・わかもと製薬の五チームが参加した。地元横浜には、チームはなかったようだ。

試合前、伊勢佐木町・野毛から関内方面と市内をパレードし、試合後には横浜政財界の「名士軍」と対戦するなどの演出もほどこされていた。選手のパレードはその後も毎年実施され、観客によるバッティング競争やボールプレゼント、女性入場無料など、観客を楽しませる工夫を凝らした。新聞報道を見る限り、毎年の入場者数は三〇〇〇人から五〇〇〇人程度だったようだ。平沼市長が在職中の五九年二月に亡くなり、市長杯トーナメントの開催は中止されたと思われる。

その後の横浜の女子野球については、さらなる調査が必要である。ここでは、横浜女子野球大会が、戦後日本の女子野球の歩みに大きな貢献をしたことを改めて確認しておきたい。(羽田博昭)